「心の教育フォーラム」開催事業の紹介

黒埼町教育委員会

地域ぐるみで道徳教育の振興をはかり、心豊かな子供を育てる事業「心の教育フォーラム」の委託を黒埼町が受けました。

黒埼中学校区が一つの地区となり平成七年三月三十一日まで実施します。町内の全部の小学校と中学校が、家庭や地域と一体となって取り組みます。町民の皆様の一層のご理解とご協力をお願いいたします。

この事業を推進するため、「心の教育フォーラム推進会議」を設け、推進会議委員を委嘱し、第一回の会合を去る五月十六日、黒埼町公民館で行いました。会議では、会長と副会長を互選し、事業の大綱について協議しました。

具体的な取り組みについては、企画会議を組織して推進していきます。

実施方針

① 地域ぐるみの道徳教育の振興充実を図るため、家庭や地域、学校が一体となって本事業を実施し、豊かな心、基本的な生活習慣などの望ましい道徳性を養う。

② 心の教育推進会議や心の教育フォーラム（「公開広場」）の開催を通して、道徳教育の理解を深めると共に、地域における体験活動や道徳的実践活動の展開を図る。

③ 町の広報紙やたより等で事業推進のようすを紹介したり、事業の成果をパンフレット等にまとめて町民に配布する。

推進組織

心の教育フォーラム推進会議

会長　社会教育委員長　須磨　俊松

副会長　黒埼中学校長　中野　徹也

委員　黒鳥小学校長　丸山　喜美

木場小学校長　高橋　巌

山田小学校長　宗村　奎助

大野小学校長　鈴木　正樹

板井小学校長　野村　邦雄

立仏小学校長　中村　芳雄

公民館長　鷲尾　忠資

主任児童民生委員　萩野　久仁子

瀧　眞琴

町PTA連絡協議会長　渡辺　武家

町民会議会長　鈴木　昭

婦人協議会長　海老名　ハツイ

社会教育課長　池乗　清市郎

事務局

学校教育課長　渡辺　廣雄

推進企画会議委員

小・中学校の道徳主任

事務局（黒埼中学校）

事業の概要

◆北部地域（大野小・山田小・立仏小）

［大野小学校］

11月8日(火)　道徳授業公開　懇談会

［山田小学校］

9月22日(木)　道徳授業公開　記念講演

［立仏小学校］

10月29日(土)　道徳授業公開　記念講演

詳しい案内は、事前に各小学校区に紹介されますので、ご参加ください。

◆南部地域（黒鳥小・木場小・板井小・黒埼中）

［黒鳥小学校］

・校内トレーニングセンター（集団生活訓練、V・S活動救急法等）
・茶まめづくり体験活動
・ぼろ布集め
・リングプル、アルミ缶、古切手集め
・黒鳥祭で手作り作品を販売して募金活動
・あいさつ、はっきり運動
・JRC活動
・道徳公開授業

［木場小学校］

・田植え、稲刈り、収穫祭の体験活動
・お年寄りとの交流会（「孫親学級」）
・一日入学交流会
・募金活動（赤い羽根、緑の羽根、日赤の災害見舞金）
・花いっぱい運動（苗植え、一人一鉢運動）
・クリーン作戦
・アルミ缶回収運動

［板井小学校］

・あいさつ運動（「いきいき板井っ子」）
・クリーン作戦（学校周辺、通学路、地域のゴミ拾いや草取り）
・アルミ缶のリサイクル運動
・廃品回収（収益金を社会福祉活動に寄付）

［南部三校合同自然教室］

・修学旅行での体験、交流
・募金活動
・クリーン作戦
・在宅弁当の宅配協力
・アルミ缶、プルタブ回収運動
・町内ボランティア組織との連携・交流
・少年の主張大会参加
・道徳授業公開

［黒埼中学校］

・クリーン作戦
・在宅弁当の宅配協力
・アルミ缶、プルタブ回収運動
・町内ボランティア組織との連携・交流
・少年の主張大会参加
・道徳授業公開

※ 各種体験活動や奉仕活動は、生徒会やJRCが中心になって推進します。

心の教育フォーラム

［期日］

平成6年11月15日(火)　13：00～16：00

［会場］

黒埼中学校

［内容］

・道徳授業公開（中学）
・奉仕、体験発表（児童、生徒、一般代表を予定）
・講演会「心の教育」関わる講演

お願い

各小・中学校で道徳の授業が公開されますが、参観後の感想や心の教育フォーラムについてご意見などをお聞かせください。事業推進の参考にしたいと思います。

地域ぐるみの道徳教育の必要性について

近年における科学技術の急速な発達と高度経済成長による物質文明社会の出現は、便利で快適な生活をもたらしましたが、一方では、児童生徒のいじめや非行、登校拒否等の問題行動が発生し、その背景には心の貧しさが指摘されています。

家族構成や就労形態の変化地域社会の人間関係に希薄化人々の価値観の多様化などにより、家庭や地域の教育力の低下が指摘され、それが学校教育にも様々な影響を及ぼしています。

豊かな心とたくましさ、基本的な生活習慣など望ましい道徳性を養うには、子供の生活基盤である家庭や地域、学校が一体となって道徳教育の重要性に対する意識を高め、具体的な取り組みを展開する必要があります。

心の教育フォーラムを実施した市町村の事業効果を聞くと、学校における道徳教育の取り組みに対する理解と協力が生まれてきている。道徳教育に対する地域ぐるみの取り組みの気運が生まれている。

町民会議や町PTA連絡協議会等の事業によって子供の健全育成の一層の促進をお願いいたします。

黒埼町の今昔

執筆　宮田栄門

新聞からたどる黒埼の歴史（十）

大野にはじめて電灯がついたのは明治四十五年のことで電気料が高く、中流家庭では茶の間に一灯だけだった。

大野の野球の始まり

大正十二年四月十日記事

西蒲原郡黒埼村は、元来同郡における運動熱の発祥地として年々優秀なる地歩を占め来つつあったが、常に大野町有志を糾合して野球奨励の目的により「ガスモク団」を組織し、練習を続けたるが四月八日午後一時より大野下川原煉瓦工場空地にて第一回戦を同町出身「学生団」と試みたるが、当日は恰も日曜のことと小学生徒の参観多く、之等の奨励に資する所多かりき。斯くて当日戦いの結果は十一対八のスコアーにて「ガスモク団」の勝利に帰したり。

註　煉瓦工場は大正期のころから川原の現在新潟モータースのあたりにあった。当時としては大規模な工場で多くの人が働いていた。

当日両軍チームのメンバーは左記の通り。

「ガスモク団」（青年たち）

(1)大坂信太郎（二ノ丁大駒洋品店）(2)大坂駒吉（七区大万）(3)渡辺（八区）(4)笠原万六（七区神田屋時計店）(5)家塚久一郎（仲町家塚屋）(6)宮野（　）(7)広川巌（現興野広川酒店）(8)宮野栄松（二ノ丁大松食堂）(9)佐藤（　）

「学生団」（新潟商業、新潟中学の生徒）(1)押見（　）(2)宮野五郎（二ノ丁滝蔵さ）(3)児玉新太郎（仲町児玉薬局）(4)佐藤（　）(5)長谷川輝也（七区）(6)渡辺権作（八区つるまき薬局）(7)田才隆直（桜町）(8)高橋正平（七区丸屋呉服店）(9)高橋秀太郎（仲町酒一商店）

大駒洋品店の故大坂信太郎さん率いる「ガスモク団」は、当時流行り始めた野球を愛好する町の進歩的な青年たちの集まりである。「ガスモク」の意は大野弁で「ゴミ」や、捨てる「クズ類」のような物の意で、これはほんのユーモア的な思いつきでつけられたものという。対する「学生団」は新商と新潟中学校の生徒たちである。当時としては新潟の学校へ行くのは裕福な家の子弟と限られたような時代であったが、生徒たちは質実剛健の気風をもって新潟まで約十キロもある悪路の砂利道を自転車で通学した。

大野野球の草わけ「太陽クラブ」ができる

七区丸屋呉服店の高橋正平さん（明治四十年生）はこの試合の時新商の二年生だったが、それから数年後、同じ七区の友人で東京から時計の修業を終えて帰った笠原万六さんらと、新商のOBを中心に「太陽クラブ」をつくった。これが大野野球のはじまりでのちの新潟薬科大学教授となった二ノ丁の浅妻康二さんや諏訪町の医師鈴木昭さんらから現代の若者達に引き継がれ、今も太陽クラブは健在である。

大正十二年四月八日の野球試合に出場した「ガスモク団」と「学生団」両チームの人たちも今では高橋正平さんただ一人となった。何しろ筆者もまだ生まれていない七十年まえのこと、新聞の氏名も姓しか載っていない人もあり、高橋さんの記憶にたよったが全員の氏名は分からなかった。

大野に電気がつく

明治四十五年一月七日記事

新潟水電株式会社は、一月一日も休まず大野町電気工事に努めたる結果、建柱架線屋内装置も完工し本日逓信省へ対して竣工届けをなし、同時に成工検査の請求をなし検査済みの当日より開業すべき見込みなれば遅くとも十五、六日頃には点灯なす運びに至るべしという。

「大野にはじめて電灯がつく」の記事である。新潟水力電気株式会社が元旦も休まず、大野町の建柱、架線、屋内配線工事に当たってくれたため、今日逓信省へ竣工届けを出し検査の済み次第十五、六日ころには点灯できるだろう、というのである。「暗いランプやローソクの生活」から開放され待望の電灯がつく。町の人たちにとってこれはどんなに素晴らしい朗報だったことだろう。しかし、実際に電灯のつけられた状況は、お金持ちの家で二、三灯がやっと位、中流以下の一般家庭では茶の間に一灯つけるのがせいぜいで、台所やその他の小部屋に電灯をひくことは経済的にとてもできなかったという。電球の明るさも今とは比べものにならぬ十燭光（十ワット）と、暗いものだったがそれでもランプに比べて明るく便利な電灯に大喜びだった。だが電気料が高かったのか台所や小部屋には昭和の初めころまで、ランプを使用する家が多かった。このランプのホヤ掃除と燃料石油の補給は子供たちの仕事として分担させられていたようで、当時の子供たちはよく家の手伝いをしたものだ。昭和十年ころになると町の大抵の家に電灯（主に裸電球）が二・三カ所位に増えたがこれは増設せず、ソケットの孫から引いた所が多かった。また電気料の節約といって夜が明けるとスイッチを切り、日が暮れて暗くなるまで昼間は暗い部屋でも電気をつけず我慢した。ランプが姿を消したのはこのころだったという。

取材協力

高橋正平さん、大坂昭二さん、岩倉正吾さん（大正元年十一月生）、小林藤司さん、高橋ハルノさん、小林省吾さん。